

FOCUS UP

選手会長最終年を襲った新型コロナ禍。現役ナンバーワンサウスポーの山本勲は今、何を思う？



▲5月29日、営業再開3日目の川崎グランドボウルにて取材。飛沫防止のため、ボウラーズベンチはボックス毎にビニールのパーテーションで仕切られていた

2005年、23歳のときにJBCナショナルチームメンバーから実技テスト免除でプロに転じ、同年の千葉オープンで制していきなりポイント&アベレージランキングの2冠に輝いた山本勲プロ。以来、上位常連のナンバーワンサウスポーとして活躍を続けてきたが、昨年はシーズン中盤の失速が響き、「ポイントの順位だけでいえば自己ワースト」の10位に甘んじた。

08年以来、10年ぶり4度目のランキング1位に返り咲いた18年から一転、苦難のシーズンとなった19年。それでも最終戦の全日本選手権で9位入賞を果たし、トップ10に滑り込んだのは、いぜん衰えぬ地力の証だろう。

「正直ホッとしました。よくも悪くも、新しいシーズンに向かう気持ちは毎年リセットできるけれど、前年の成績次第でモチベーションは違ってくる。今年は去年の反省をバネに巻き返すぞ!とっていました」

だが、捲土重来を誓って迎え

た今季は、新型コロナ禍という未曾有の非常事態に見舞われてすべてが白紙に。2月の「KUWATA CUP2020」、3月の「住建ハウジングプレゼンツ・チャンピオンズカップ」と世間的にも大きな話題を集めていた大会が相次いで開催中止となって以降、緊急事態宣言が解除された今なお、シーズン再開の見通しは立っていない。

「選手会長として2月の『スポンサー感謝の集い』であいさつしたところには想像もしなかった状況ですが、『KUWATA CUP』の中止がギリギリのタ

イミングで発表されたときに、これは長引きそうだな…と覚悟しました」

業務委託契約で勤務する川崎グランドボウルからは、4月7日の緊急事態宣言発令を機に自宅待機を要請され、約1カ月半の自粛生活を余儀なくされた。山本プロにとって、今季は18年度から3年任期で務めてきた選手会長の最終年でもあり、自粛期間中はZOOMアプリを使ったリモート会議を積極的に開催して、関係者と意見交換にいそしんだという。

「オフィシャルパートナーのランクシーカーさんも、自粛期間は逆にプロボウラーを知ってもらうチャンスと捉えて、毎日のようにライブ配信してくださっています。ここ数年、ボウリングを盛り上げようと動いている人が増えているのは間違いありませんし、いま踏みとどまれば、よりよい方向に変わりつつあるプロボウリング界がさらに発展していく可能性は十分ある、と思っています」

「左腕初の永久シードを目標に

神奈川県は5月25日に緊急事態宣言が解除され、27日には自粛要請も全面解除。センターの営業も、グランドボウルが策定した感染防止のガイドラインに従って同日に再開された。山本プロもプロショップの勤務に戻り、28日にはアプローチに立って、30分ほど投球練習も行ったそうだ。

「最初は『15球がこんなに重たかったか!?!』という感覚で、終わりころようやく半分くらい感覚が戻ってきた感じ。指が細くなっていて、以前より多くテープを貼りました(苦笑)。ボウリング場が動き出して、また投げられるようになったのは喜ばしいけれど、公式戦の先行き、は不透明で目標が定まらない。



▲2月の「スポンサー感謝の集い」では女子選手会長の佐藤まさみプロ(42期)と並んで謝辞を述べた(4日、ジョエル・ロブション恵比寿ガーデンプレイス店)

どこで本格的にスイッチを入れるべきか見えない状況なのもどかしいですね(苦笑)」

昨シーズンまでの15年間に獲得したタイトル数は15。その中には06~08年の全日本選手権3連覇、07~08年のジャパンオープン連覇の偉業も含まれる。ちなみに、08年のジャパンオープンでは優勝決定戦で特別賞金1000万円のかかったパーフェクトゲームを達成している。

あと5勝を積み上げてV20に到達すれば、男子プロでは過去に5人しかいない永久シードプロ(現在、5年後輩の川添奨

太プロが19勝で6人目に王手)の仲間入りを、サウスポーとして初めて果たすことになる。

「左投げでは、3年前に亡くなった龍隆行プロ(8期)の17勝が最高ですね。2年前のジャパンオープンで15勝に達したときから、あと2つで追いつくという意識は常に持っています。20勝は、そこを超え

た先に見えてくる目標。現状のトーナメント数からすれば簡単ではないけれど、決してクリアできない数字ではないと思っています」

まだ38歳。目の前に達成可能な目標があれば、それが困難な状況下でも諦めずに前を向く糧となる。晴れてトーナメントが再開したあかつきには、山本プロの一挙手一投足に要注目だ。

やまもと・いさお/1982年1月6日生まれ、神奈川県出身。2005年プロ入り(44期/ライセンスNo.1078)。163cm82kg、左投げ。優勝15回。公認パーフェクト17回、公認800シリーズ&⑦-⑩スプリットメイド各3回。現JPBA選手会長、トーナメント委員会委員長。ABS所属。

随時掲載 “社長プロ”鈴木馨の企業散歩③

「ハウスボールで世界3位」の過去を持つJVCKENWOOD社専務執行役員

今回は私、鈴木が企画・運営責任者を務めるJPBA承認大会「ウェブアイカップ」や、あの「KUWATA CUP」の協賛スポンサーでもある株式会社JVCケンウッド(以下JVCKENWOOD)様をお訪ねし、取締役・専務執行役員の野村昌雄氏(61)にお話をうかがいました。

JVCKENWOODは2008年(平成20年)10月に日本ビクター株式会社と株式会社ケンウッドが経営統合して誕生した映像機器・音響機器などの大手メーカーで、野村氏は14年にカーエレクトロニクスセグメントOEM事業統括部長として入社。それ以前にも多数の企業で取締役職を歴任してこられた人物です。今回は前2回とは少々趣向を変えて?インタビュー形式でお届けします。

鈴木 いつもボウリングをご支援いただき、ありがとうございます。「KUWATA CUP」も協賛されていましたね。

野村 桑田さんとは、彼がデビュー当時からの付き合いでね。スタジオがうちの会社の隣だったんですよ。残念ながら今年は新型コロナの影響で中止になってしまいましたが、去年の第1回大会は大きな話題になって、

よかったですね。

鈴木 私も野村さんとはデビュー当時からの付き合いでご支援いただき、とてもうれしいです。ウェブアイカップは過去2回とも会場で長時間ご覧になっていただきましたが、どのような印象を持たれましたか?

野村 大会当日は、事前に予選を通過した選手が出場したんですよ? すごい人数だなと思

って。ボールも一人でずいぶんたくさん使うんだな、と(笑)。

鈴木 そうですね。ボールは一つひとつに個性があって、そのときの戦略によって替えるので、ゲーム数にもよりますが、大会には6個くらい持っています。ゴルフクラブと同じよう

なものでしょうか。野村さんは、ボウリングはされないのですか?

野村 日商岩井(現・双日株式会社)時代の1985年に『24時間世界ボウリングマッチ』というのに参加したことがありますよ。それぞれの国で投げますが、時差の関係で日本がスタート国でね。3人一組で1人2ゲーム、会場は吉祥寺の東京ボ



▲野村氏(左)と鈴木プロ

ウリングセンターでした。そのときにチームで世界3位になりました。ハウスボールでね。それはちょっと自慢できるかな(笑)。

鈴木 それはすごい! ところで野村さん、ボウリング界をより発展させるにはどうしたらよいと思われませんか?

野村 まずはトーナメントの賞金額…と思いますが、鈴木

さんはスポーツ医学と動作解析が専門でしたよね。うちのスポーツコーチングカメラシステムをご存じですか? あれを使って何か研究できるんじゃないかな協力できると思いますよ。

鈴木 ありがとうございます!

☆

JVCKENWOODさんのスポーツコーチングカメラシステムは、スポーツの動作・フォームなどの映像分析ツールです。瞬間的な動きをさまざまなスピードで高画質に記録することができて、サッカー、野球、卓球陸上競技などでも研究に利用されています。

鈴木さんのデビュー当時からスポンサーをしてくださっている同社の製品を使って専門分野の研究ができるなんて、夢のようなお話です。業界発展のための「何か」はここから生まれるかもしれない…と、貴重なヒントをいただくことができました。

すずき・かおる/1976年4月27日生まれ、岩手県出身。2018年プロ入り(51期/ライセンスNo.576)。162cm、右投げ。機ウェブアイ/プロショップナカライラウンドワン南砂店所属。株式会社BELL代表取締役社長。